

エルサレムの見張り人としての召命

「イザヤ書」からの説教 (No.11)

【聖書箇所】 62章6～7節



ベレーシート

●マタイの福音書の1章1節を開くと、「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」とあります。そこに登場する三人の人物―「アブラハム」「ダビデ」「イエス・キリスト」に共通するキーワードは何かと問われた時、何と答えるでしょうか。

おそらく悩むのではないかと思います。その答えは「エルサレム」です。今回は前回の続きです。前回は、神のみこころの中心にあるのは「エルサレム」であることを学びました。「エルサレム」という神の都の名称に隠された秘密、それは「神のご計画のヴィジョンとそこにある神のすべての祝福」を意味しているということです。

(1) アブラハム

●神から「わたしの示す地へ行け」(創世記12章)と言われて召し出された彼が、信仰によって義とされる(同15章)前に、彼はエラムの王ケドルラオメル軍を破り、甥のロトとその家族、そして彼らの財産を取り戻したときに、いと高き神の祭司であったシャレムの王メルキゼデクを通して神の祝福を受けました(同14章)。そしてアブラハムはそのメルキゼデクに対して戦利品の10分の1を彼にささげました。その出来事が意味することを、私は長い間、悟ることができませんでした。それはなぜかと言うと、神のご計画の中心に「エルサレム」というキーワードがあることを、私は知らなかったからです。創世記14章でアブラハムを祝福した「シャレムの王メルキゼデク」という人物は、「シャレム」、つまり「エルサレム」の王であり祭司なのですが、ヘブル人の手紙7章によれば、彼は「父もなく、母もなく、系図もなく、その生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子とされ、いつまでも祭司としてとどまっている」と紹介されています(ヘブル7:3)。そのような人物はとても珍しいというか、この世ではあり得ない存在です。受肉前のイエシュアが旧約時代においてなんだかこの世に登場しているのです。今回はそれについて学ぶことはしませんが、聖書箇所だけを記しておきます。

- ①シャレムの王であり、祭司のメルキゼデク(創世記14章)。
- ②アブラハムを訪れた三人の人のうちのひとり(創世記18章)。
- ③エリコを前にしてヨシュアの前に現われた抜き身の剣をもった主の軍の将(ヨシュア記5章)。

●ここに共通していることは、登場した人物が礼拝を受けているということです。御使いならば、御使いは礼拝されることを拒否するはずですが、ここで登場した存在は、アブラハムから、そしてヨシュアから礼拝を受けた存在であるとすれば、それは受肉前のイエシュアでしかありません。

●アブラハムの生涯において、エルサレムと関係するのは創世記22章に記されている出来事です。「モリヤの山で息子のイサクを全焼のいけにえとして神にささげよ」という神の命令は、アブラハムにとって信仰の最大の試練でしたが、アブラハムはそれに従います。その信仰が試された地である「モリヤの山」が「エルサレム」で

した。アブラハムはここで神のヴィジョンを見たのです。ヴィジョンとは神のご計画の究極です。詳しくは前回のプリントを参照のこと。

(2) ダビデ

●ダビデが全イスラエルの王となって最初にしたことは、エルサレムを首都としたことです。ダビデはエルサレムのシオンの丘に契約の箱を運び込み、新しい礼拝を始めました。「契約の箱」は神ご自身の臨在の象徴です。詩篇 132 篇 13 節には「主はシオンを選び、それをご自分の住みかとして望まれた。『これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから・・・』」と記されています。

(3) イエシュア

●ダビデの子であるイエシュアは、初臨において、エルサレムで十字架の贖いの死を受けられ、そして三日目に死から甦り、再びそこに戻ってくることを約束されて天に帰られました。そこから再びエルサレムに帰ってこられたとき、メシア王国が実現します。このときにはっきりと形をとって現わされるのが、「御国の福音」です。イエシュアはもともとこの「御国の福音」を告げ知らせるためにこの世に来られたのです。

●このように、アブラハム、ダビデ、そしてイエシュアを貫いている鍵は「エルサレム」です。しかもそこはメシア王国のセンターであり、次のステージである天から降りてくる「新しい都エルサレム」の舞台でもあるのです。その内実は、かつてエデンの園にあったものが回復されるのです。表わされている表象は若干異なりますが、内実はエデンの園そのものなのです。「エデンの園」は「新しいエルサレム」と同義なのです。神の救いの歴史において常にこだわり続けているのが、「エルサレム」であり、「エデンの回復」なのです。そしてそれが神のマスタープラン(神の不変のご計画)であり、それが必ず実現するというのが「御国の福音」(御国の良きおとずれ = Good News)です。「神の国はあなたがたのただ中にある。」(ルカ 17:21)とイエシュアは言われましたが、それは今日、まだ「からし種」程度のもので、種であったとしても、それはやがて大木ほどに成長するのです。

1. 主がエルサレムの城壁に置かれる見張り人

●そこで今回は、前回に続いてイザヤ書 62 章から、エルサレムの城壁の上に置かれた「見張り人とその務め」について取り上げてみたいと思います。

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 62 章 6~7 節

6 エルサレムよ。わたしはあなたの城壁の上に見張り人を置いた。昼の間も、夜の間も、彼らは決して黙ってはいない。【主】に覚えられている者たちよ。黙りこんではならない。

7 主がエルサレムを堅く立て、この地でエルサレムを栄誉とされるまで、黙ってはいない。

(1) 「見張る」という語彙

●ここで語られているのは、神である主がこだわり続けている「エルサレム」に対してです。「見張り人」とは

どんな人のことを言うのでしょうか。またその務めとは何でしょうか。

●ヘブル語で「見張る」という意味を持つ語彙が四つほどありますが、その中で重要なのは以下の三つです。

- ①「シャーカド」 טקֹּץ 「見張る」「目覚めている」 18回。
- ②「ツアーファー」 נִצָּץ 「見張る」「監視する」 84回。
- ③「シャーマル」 שָׁמַר 「守る」「見張る」「気をつける」 469回。

●三つの語彙を見ると、ダントツに「シャーマル」が多く使われていますが、「見張る」という概念をより正確に理解するためには、他の二つの語彙の理解も重要だと考えます。ちなみに、イザヤ書 62 章 6 節に使われている「見張り人」は動詞「シャーマル」の分詞形です。

●**第一に、「シャーカド」(טקֹּץ)を見てみましょう。**イザヤ書でこの語彙が使われているのは 1 回のみです。むしろ、この語彙の意味がよく理解できる例としては、エレミヤ書 1 章 12 節があります。1 章はエレミヤの召命の記事が記されています。ここから多くの方が「私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」というエレミヤの言葉に励まされて主の召しを受け取られる方が多いようです。しかしエレミヤは若いのですが、重要な資質をもっていたのです。11 節に、エレミヤに対する主のことばにそのことが示唆されています。「エレミヤ。何を正在しているのか。」そこでエレミヤは言います。「アーモンドの枝を正在しています。」と。すると主は、「よく見たものだ。わたしのことばを實現しようと、わたしは見張っているからだ。」と言ったのです。ここで主はエレミヤに「よく見たものだ」と感嘆の声を上げています。

●主はエレミヤに「何を正在しているのか」という問いかけに、エレミヤは「アーモンドの枝を正在しています」と答えています。文語訳は「アーモンド」を「巴旦杏(はたんきょう)」と訳しています。関根訳はここを「目覚めの木の枝が見えます」と訳しています。「アーモンドの木」を「目覚めの木」と訳していますが、「見張りの木」とも訳せません。そして、主はエレミヤに「よく見たものだ」(新改訳)と言っています。新共同訳はここを「あなたの見るとおりだ」と訳しています。つまり、主と同じところに目を向けているという意味で、「よくぞ見たものだ」と感心して言っているのです。エレミヤと主の思いが一つになって、同じ方向を正在していることに対して、主はこのほか喜んでいるというニュアンスです。これは「見張り人としての姿勢」を教えています。

●「アーモンド」(別名、あめんどう、巴旦杏)は 1~2 月頃に他の木に先立って冬の眠りから醒めて芽を出し、花を咲かせます。それゆえ「目覚めの木」とも呼ばれるのですが、これはまさに「よみがえりのいのちの初穂」を象徴しているのです。重要なことは、エレミヤも主も神の民の回復(よみがえり)の實現のために、注意を払い、関心を持ち、目を覚まして見張っているのです。



●**第二に、「ツアーファー」(נִצָּץ)を見てみましょう。**イザヤ書で使われている箇所を見てみると、まずは 21 章 5 節で、食卓を照らす燭台に「灯をともし」という意味で使われています。52 章 8 節では、主の見張り人が見るべきものを見て、声を張り上げて共に喜んでいます。その見るべきこととは、主がシオンに帰られることです。ところが、56 章 10 節では、見張り人としての務めが非難されています。それは見張り人が眠りをむさぼっているからです。そのために盲人のように見張るべきものが見えず、おしの犬のように吠えることもできない

とあります。盲人であること、おしであることは、見張り人の務めにおいて致命的欠陥です。つまり、この語彙には、「見張り人としての務め」の重要性が語られています。

●第三に、「シャーマル」(𐤑𐤍𐤔)を見てみましょう。この語彙は、この務めは「**神からの召しであり、常に、継続的な務め**」であるという意味で「守る」という面が強調されています。自分の気の向いた時にすれば良いという務めではなく、24時間体制の使命的自覚が求められる務めなのです。ですから、神からの召しがなければできない務めと言えるでしょう。そして、見たことについて、人を恐れることなく語らなければならない、決して黙ってはいならない務めだということです。「シャーマル」は、①の神と同じ方向を見ている姿勢と、②のその務めの重要性を合わせ持った意味が含まれていると言えます。

2. 「見張り人」が見張るべきこととは何か

●それは、神のマスタープランとも言うべき神のご計画であり、「エルサレム」という場において実現される「**御国の福音**」です。メシアの再臨によってもたらされる「良きおとずれ」なのです。このことにひとたび目が開かれると、聖書が語っているメッセージの骨子はまさにこのことだと確信できるのです。聖書の数多くのピースがこの骨子を中心にして散在しているのです。これが聖書の主題だと確信し、それを伝えるためには、それを論証するための構えが必要になって来ます。つまり、相当の聖書の勉強が必要となります。

●聖書全体に流れている主題とはいったいなにか。私が卒業した神学校は「きよめ派」と言われる神学校であったために、どうしても教理的な聖書神学が樹立してしまいます。つまり、「ホーリネス」こそ、聖書全体を貫いている主題であることを様々な領域から検証し、論証されなければなりません。そうすることで、教団としてのアイデンティティが確立するのですが、教会の歴史的伝統が強い場合には、確立した理解の型紙から抜け出すことは容易ではありません。理解の型紙は、聖書を理解していく一つの道しるべともなっているために、それを打ち破るには相当の確信と勇気が必要となります。場合によっては、神学的戦いを余儀なくされるでしょう。

(1) 「御国の福音」への気づき

●神の導きは私たちの思いや考えを越えて働いています。特に、重要な事柄への導きは時にはいつから始まったのか、明確ではないこともしばしばです。2014年の2月に、連盟の牧師会が静岡でもたれました。そのときの「霊性の回復セミナー」で、私は使徒の働き20章から、「神の恵みの福音」と「御国の福音」があることに気づかされたので、そのことを扱いました。「神の恵みの福音」は「和解の福音」とも「十字架の福音」とも呼ばれますが、「御国の福音」についてはこれまで盲目でした。前者と後者の区別がついておらず、ごっちゃになっていたのです。

●聖書を瞑想し、置換神学と個人的救いの強調の弊害を感じながら、ヘブル的視点から聖書を横に読み続けてきました。その間、不思議な出会いを経験しながら導かれてきましたが、混乱の原因の一つとして、伝道至上主義に立った聖書理解もひとつの理解の型紙となっていることに気づき始めました。初代教会の福音の理解、そして使徒パウロの福音の理解には二つの面があること、つまり、御国の福音の中に神の恵みの福音が位置づけられて

いることに気づき始めました。福音を伝えて行く場合に重要なのは、個人の体験、個人の信仰のあかしです。これはイエシュアの十字架の恵みの福音のもつ性格です。罪の赦しの確信、神の子どもとされた確信、自分中心ではなく神中心の生き方をもたらす神の愛と恵みの経験を目に見える形に、すなわち、生き方であかししていく必要に迫られるのです。しかし、「御国の福音」はあかしできません。これは神の約束を信じることであり、しかも独りよがりではなく、聖書によって論証することが求められます。使徒パウロは、エペソの教会を建て上げて行く上で、彼は「神の恵みの福音」をあかしすると同時に、「御国の福音」を語り続けました。しかも、「余すところなく」とあります。

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 20章 24～27節

24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、**神の恵みの福音**をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。

25 皆さん。**御国**を宣べ伝えてあなたがたの中を巡回した私の顔を、あなたがたはもう二度と見ることがないことを、いま私は知っています。(※「御国」を「御国の福音」と訳すこともできます。)

26 ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。

27 **私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたから**です。



●パウロほどに神の恵みの豊かさをあかしした人はいません。そして「この恵みが与えられたのは、キリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝える」ためである使命を自覚していました。自分に対する救いも、罪の赦しも、いやしも働きも、すべて神の恵みとして経験したことを彼はあかししています。と同時に彼は、長い間隠されてきた「御国の福音」の奥義を啓示された人でもあります。

●キリスト教会は主にある一人ひとりに対して、自分が経験した神の恵みの福音をあかしする(testifying)ことを心掛けてきたと思います。単なる知識ではなく、生きたあかし人となることを勧めてきました。それは正しいことであり、間違っはおりません。しかし見落としてきたものがあるのです。それが「御国の福音」を宣べ伝え(preaching)、教え伝える(teaching)ということです。

(2) 「御国の福音」は、神のご計画全体におよぶ

●しかし、「御国の福音」は、27節に示されているように、「神のご計画全体」におよぶ鳥瞰的な内容を含んでいます。しかもパウロは、それを「余すところなく知らせておいた」と述べています。「余すところなく」と訳されたギリシア語は「退く、ひるむ、避ける」という意味の「ヒュポステッロー」(ὕποστἐλλω)と、それを否定することばで表現しています。難しいという理由で、語ることを「ひるんだりはしない」と言っているのです。この視点が聖書の正しい理解を支えて行きます。見知らぬ地でも地図をもって歩くことになるので、自分の思いや判断で迷路に入ったりする失敗が少なくなるのです。

●パウロのいう「御国の福音」は、イエシュアがイスラエルの民に向けて語った福音です。この福音は、旧約のアブラハム契約、モーセ契約、ダビデ契約など、預言者が語ったように、「終わりの日」にメシアによって実現する神の統治(支配)の到来によって実現し、完成する福音です。しかもそれはこの地上において目に見える形で実現します。「御国の福音」は、イエシュアの再臨によって実現する「メシア王国」(千年王国)であると同時に、次のステージをも含んでいます。つまり、黙示録 21~22 章に描かれているような永遠の御国(新しいエルサレム)が備えられています。

(3) 「御国の福音」は「エデンの回復」と同義

●「御国の福音」は「エデンの園」の回復です。「エデンの園」に隠されている啓示と、「永遠の御国」に隠されている啓示に整合性がなくてはなりません。「エデンの園」についての秘密は別の機会に取り上げたいと思いますが、黙示録 21 章に登場する「新しいエルサレム」の規模は、一辺が 12000 スタディオン(2220km)の立方体です。それが新しい天から新しい地に降りて来るのです。地上のどこに降りて来るかと言えば、それは少なくとも、エルサレムを中心としているはずで

●おそらく聖書の舞台は中東であることから、右の図が参考になるかもしれません。

ベアハリート

●聖書の全体像を語り続けることは、容易なことではありませんが、天が開けて神の偉大さを垣間見ることができるのです。そして、私たちの行き着くところをしっかりと描けることによって、私たちに与えられている望みが確かなものとなっていきます。使徒ペテロは、「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。」(Iペテロ 3:15)と述べています。ここに、「見張り人」としての召しが語られているのではないのでしょうか。【2014. 12.21】

立方体の一辺が 12000 スタディオン=2,220km

